

「うん系」感動詞の韻律的特徴に関する一考察 「受け入れ」にかかわる意味・機能をめぐって

須藤 潤

アブストラクト

日本語の「うん系」感動詞はさまざまな音声的特徴を持つと同時に、さまざまな意味・機能を持つ。そのうち、発話内容、状況等を理解した、あるいは発話を単に聞いている際に出現する「受け入れ」の意味・機能を持つものは、受け入れの度合いや形式の面で非常に多彩であるが、「同意」という概念を軸に考えると、同意の「うん」と不同意の「うん」という受け入れの度合いの明らかに異なる「うん」が見られる。そこで、これらの「うん」を含む会話文を読み上げてもらう実験を行い、それぞれの「うん」の韻律的特徴を音響的に分析した。

分析の結果、「うん」の持続時間については不同意のほうが長く、 F_0 （基本周波数）の下降の傾きについては同意の「うん」のほうが大きいという傾向が見られた。不同意の際に持続時間が長くなることについては、相手との意見の相違の表明と同時に対人関係の維持を考慮するという点が、また F_0 の下降については、それぞれの「うん」の持つ肯定的な要素の度合いが関与していることを指摘した。

キーワード：感動詞、受け入れ、同意、持続時間、 F_0 （基本周波数）

1. はじめに

1.1 感動詞と音声的特徴

日本語の感動詞と言えば、例えば、何かに驚いたり感動したり、話し手の感情の動きに即して発せられる「あっ」「えっ」「わあ」「へえ」「おや」「まあ」「あーあ」などといった語群や、相手の問いかけに答えるときに発せられる「ええ」「はい」「いいえ」といった語群、さらには、「おい」「こら」などといった呼びかけ、「よいしょ」「せーの」などの掛け声、「やあ」「こんにちは」「おはようございます」といったあいさつなど、ざっと挙げただけでも、感動詞のカテゴリは広く、そして雑多なものに思える。

このようなバラエティに富む感動詞は、これまで様々な研究によって位置づけが試みられている。例えば、伝統的な国語学を基盤とした文法論では、感動詞は文としては独立した成分で、一語のみで一文が形成できる、といった位置づけがなされている（鈴木1973）。また、談話研究においても、感動詞は、応答表現、あいづち、談話標識、言いよどみ・フィラーといった位置づけがなされている。感動詞は談話、特に音声を媒介とした会話において不可欠であり、談話研究にとって重要な要素であるといえる。

それでは、音声の側面からはどのような位置づけがなされているのであろうか。管見の限り、感動詞全体を体系的に音声の枠組みに位置づけた研究は見当たらない。しかし、以下に述べるように、感動詞は他の品詞とは異なる音声的特徴を多く兼ね備えている。

周知のとおり、日本語（東京方言）の一般的な語はアクセントを持ち、それぞれの語固有の音の高さの変動のパターンはアクセント型（平板型・起伏型）で説明可能であるとされている。だが、感動詞の場合を見てみると、例えば、否定の応答に用いられる「うん」¹は語頭から下降して、語末で急激に上昇する、あるいは、やや上昇することが多く（須藤2007a）、この場合、アクセント型のみで

この音の高さの変動を説明することは不可能である。

また、「ああ」「ええ」「はい」「うん」といった感動詞の音の高さが語頭から顕著に下降している場合、それぞれの用法は異なるものの、共通して同意や相手の話を聞いているといった話し手²の態度を示すことが可能である。日本語の語で頭高型アクセントが共通の意味を持つということは通常ないわけで、この点からも、感動詞は一般的な語アクセント体系とは幾分異質である。このような現象を踏まえると、感動詞の音の高さの変化は語アクセントによるものなのか、イントネーションによるものなのかという問題が生じる。

このように、アクセント・イントネーションの問題を見ただけでも、感動詞は音声的特徴において一般的な語とは異なる様相を呈していると言える。言い換えれば、感動詞に対する研究は、通常のアクセント・イントネーションの枠組みで説明可能である他の品詞に対する研究の方法と同じでは通用しない可能性があるということである。したがって、音声的特徴に着目することで、今まで以上に詳細な分析が可能となるだけでなく、文字表記からは見えなかったことが新たに発見できる可能性があるのである。

そこで、筆者は感動詞の音声的特徴を記述し、そして、その音声的特徴の側面から感動詞の機能を解明する目的で、現在、内省を中心とした音調（音の高さの変化）の記述（須藤2008予定）および、会話データや実験的手法を用いた具体的な音声的特徴の記述（須藤2005, 2007a, 2007b）を進めている段階である。本稿では、具体的な音声的特徴の記述として、実験的手法で採集した「うん系」感動詞の韻律的特徴について音響分析を行い、言語的な意味・機能³と韻律的特徴との関係について考察を行う。

1.2 「うん系」感動詞と意味・機能

それでは、次に、感動詞の音声的特徴を記述する目的で、なぜ「うん系」感動詞を分析の対象とするかという根拠について述べることにする。

「うん系」感動詞とは、一般的には「うん」をはじめ、「うーん」「んん」「ん」「ううん」「ふうん」などと表記される感動詞を総称したものである。これらは、共通点として、おおむね[m]や[n]といった鼻子音、[~]といった鼻母音で構成され、その上で、長さや音調の違いや無声化の有無などといった様々な音声的特徴が伴っている。

このような音声的特徴のバリエーションの多さと同時に、談話におけるあいづちや問い返し、肯定的な応答、否定的な応答などといった広範な意味・機能を持って出現している。定延（2002）は、非言語的な「うん」・独話で発せられる「うん」・対話固有の「うん」という3つの大分類の下に17種類のタイプがあるとしている。

そして、これらの意味・機能については、少なくとも書きことばにおいては、「うん」に肯定的な応答、「ううん」に否定的な応答というように、それぞれの表記にある程度対応しており、このように日常的に見られるものについては辞書レベルで対応関係が記述されている。

話しことばについては、須藤（2007b）が、本格的な対応関係を記述する前段階として、「うん系」感動詞の意味・機能をテレビドラマの会話をもとに分類し、それと対応する音調を記述している。表1は、須藤（2007b）で分類した「うん系」感動詞の意味・機能と、意味・機能と音声的特徴に共通性が見られる他の感動詞を列挙したものである。意味・機能については、話し手が他から得た情報をどう処理したかを「うん系」感動詞によって表示できるという立場に立ち、その処理過程に応じて、「入力情報の処理結果表示系（A）」「入力情報の処理開始表示系（B）」「入力情報の処理前表示系（C）」「非処理系（D）」という4つのカテゴリに分類している。なお、BとCの分類のラベリングについては、入力情報の処理過程を再考した上で、須藤（2007b）で示したもものから修正を施している。

また、表2は、これらの分類について予想される音声的特徴を示したものである。音調はそれぞれ

「うん系」感動詞の韻律的特徴に関する一考察
 「受け入れ」にかかわる意味・機能をめぐって

の「うん系」感動詞の基本的なピッチ曲線の特徴から「下降調」「平坦調」「上昇調」と複合型の「下降上昇調」に区分し、持続時間については、採集した「うん系」感動詞が100～300ms前後のものと、それを越えて長いもの（500～600ms前後）とに、意味・機能の面からおおよそ区分できたことから、ひとまずこの2区分（「短」と「長」）を設けることにした。

これらは、今後、実験的手法による分析など様々な検証を通して、修正をしていかなければならないが、「うん系」感動詞の意味・機能および音声的特徴の多様性を示していると言える。

表1 「うん系」感動詞の意味・機能の分類と、意味・機能と音声的特徴に共通性がある他の感動詞

「うん系」感動詞の意味・機能	共通性がある感動詞
A. 入力情報の処理結果表示系	
A-1 情報の入力に対する肯定的な結果表示	はい ええ
応答要求発話に対する肯定的な応答	はい ええ
行為要求発話に対する承諾	はい ええ ああ おお
受け入れ	
A-2 理解不能の情報の入力に対する結果表示	え えー? はい?
A-3 情報の入力に対する否定的な結果表示	いいえ いえ いや
A-4 未知の情報の格納に対する結果表示	へえー ほー
B. 入力情報の処理開始表示系	
認識の変化	あ
C. 入力情報の処理前表示系	
迷い、言いよどみ	ええと えー あのー
D. 非処理系	
決意、促し	さあ ほら

表2 「うん系」感動詞の意味・機能（A～D）と予想される音声的特徴（須藤2007b）

持続時間	音 調		
	下降調	平坦調	上昇調
短	A-1	B* D*	A-2（急激な上昇調）
	下降上昇調...A-3*		
長		C	A-4（ゆるやかな上昇調）

* 終端に声門閉鎖が伴うことがあるもの

このように「うん系」感動詞は意味・機能および音声的特徴が非常に多様である。そして、表1の右に示したように、音声的特徴や意味・機能で共通性がある他の感動詞も多いことから、「うん系」感動詞の音声的特徴を記述し、音声の側面から意味・機能を明らかにすることは、他の多くの感動詞に対する分析の大きな手がかりとなると言える。したがって、「うん系」感動詞を分析対象とすることは、感動詞全体の音声的特徴の記述、意味・機能の解明に寄与するものであり、妥当であると考えられる。

1.3 問題の所在 受け入れの度合いと「うん」⁴の韻律的特徴

前節で見たように、「うん系」感動詞は、話し手の情報処理過程の表示のしかたから、大きく4つの意味・機能のグループを持ち、そのうちAのグループは処理結果に応じて4つのサブカテゴリに分けられた。その中で「情報の入力に対する肯定的な結果表示」(A-1)は、須藤(2007b)では最も採集数が多かった。そして、用法を含めて詳しく観察してみると、「応答要求発話に対する肯定的な応答」「行為要求発話に対する承諾」「受け入れ」という3つのタイプがあり、さらに、受け入れには4つの下位タイプが見られ、単なる「肯定的な結果表示」といっても、非常に多彩であった。そこで、ここでは、この受け入れの「うん」の多彩な意味・機能と音声的特徴に着目することにする。

受け入れの「うん」は、相手の発話を受けて発するだけでなく、自分の発話の途中で、相手の発話の途中で発することができ、形式的にも多彩である。また、相手の発話内容に同意・納得する、自分の発話の途中や直後で発話内容を追認する、相手の発話を聞いている、相手の考えを受け入れつつも不満である、というように、受け入れの度合いという面でも多彩である。しかし、受け入れの度合いを、「同意」という概念を軸に見てみると、受け入れの度合いの異なる2つのタイプの「うん」が見られる。

1つは、相手の意見を聞いて、理解し、そして同意する場合の「うん」である。下の【会話例1】はテレビドラマ『野ブタ。をプロデュース』の中の会話の一部であるが、Z03はYの意見に同意する発話であり、その発話に「うん」が出現している。

【会話例1】⁵放送部の部員がビデオを見た感想を言い合う。Xは男性、Y、Zは女性。

- X01 : これ:(.) どうか
 Y02 :(0.6) わたしはよかったと思う。
 Z03 : うんあたしも。

もう1つは、相手の意見を聞いて、理解しつつも、同意はしない場合の「うん」である。【会話例2】はNHK教育テレビの『真剣10代しゃべり場』という、10歳代の若者が集まり討論する番組の中の会話の一部である。ここでは、ナンパの是非について討論しており、Y(男性)はナンパをして当たって砕けたほうがいい、と主張するのに対し、W(女性)はそれを受け入れつつも、「恥ずかしい」という同意しがたい点を指摘している。このWの発話(W07)に先立ち、Y01とY03を聞いた時点のW05で「うん」が現れる。このように、「うん」がむしろ反論の端緒となることもある。

【会話例2】⁶ナンパをして当たって砕けたほうがいいかどうかの議論

- Y01 : 怖がって何もしないよりは(0.7)全然なんか(0.5)壁に - ぶち当たって
 (W)02 : うん。
 Y03 :(0.5)なんかこう(0.4)砕けたほうが(0.7)いんじゃないっていうの俺は言いたい。
 (X)04 : うん -
 W05 : [うん =
 (Z)06 : [うん
 W07 : なんか(0.5)うちは(.)その(.)すごいタイプの人がある所に(.)いて(.)こま
 街角とか(0.7)でも(0.8)はずかんだ(0.5)話しかけんのがすごいだからその(0.4)
 当たって砕けるってのもわかるんだけど

これら2つのタイプの「うん」は、受け入れの「うん」とみなせるとはいえ、「同意」「不同意」という点で対照的であり、受け入れの度合いが異なっていると言えよう。それでは、これらの「うん」の韻律的特徴はいったいどうなっているのだろうか。仮説として2つの側面が考えられる。

「うん系」感動詞の韻律的特徴に関する一考察
「受け入れ」にかかわる意味・機能をめぐって

1つは、どちらの「うん」も相手の発話を聞き、理解しているという点では共通していることから、韻律的にもある程度共通していて、同意か不同意かの解釈は、発話内容の解釈によればいい、という側面である。もう1つは、会話の中でこれらの発話を聞いて、実時間で同意あるいは不同意と解釈できるためには、「うん」の韻律的特徴にも、その差がある程度反映されていたほうが会話参加者にとって都合がいい、という側面である。

そこで、これら2つの「うん」の韻律的特徴について、どの程度共通していて、また、どの程度相違しているか、ということを検討するために、これらの「うん」を含む発話を調査協力者に読んでもらう会話文読み上げ実験を行い、それによって得られた「うん」を音響的に分析することとした。

2. 会話文読み上げ実験

2.1 概要

前節で挙げた、受け入れの2種類の「うん」(以下、同意の「うん」、不同意の「うん」とする)が調査協力者の発話に含まれる会話文をそれぞれ作成し、実験実施者(筆者)と調査協力者がそれぞれの役割になり、実際に話しているように読み合った。調査協力者が読み上げた発話はヘッドセットのコンデンサ・マイクを用い、量子化16bitのPCM方式(サンプリングレート:44.1kHz)で録音し、「うん」を含む発話については音響分析ソフトSpeech Analyzer Ver. 2.7で観察・分析を行った。

2.2 調査協力者

調査協力者は東京都内および川崎市・横浜市出身(中学校までの期間で最も長く住んでいた地)の20歳代・30歳代・40歳代の男性5名・女性5名の計10名にご協力いただいた。調査協力者の性別・年齢・出身地・職業については表3のとおりである。

2.3 実験手順

まず、調査協力者には、実験の手順、そして、会話文とその説明文を読んでもらい、会話の状況等を理解してもらった。「うん」が入るところは、「うん」とは書かず空欄にし、別途実験指示文にさまざまな表記の例を挙げて空欄に入れる「うん」の音声を説明し、発話に適切な「うん」の発音をなるべく表記に左右されずに考えてもらうようにした。その後、一度、実験実施者と調査協力者で読み合わせの練習をし、その後の3回の読み合わせをデータとして採用した。

2.4 実験に用いた会話文

調査協力者に読んでもらった会話文は筆者が作成したものである。[資料2]の会話文のように、会話の参加者AとBは親しい友達という設定で、学校の課題で「引きこもり」の対策について考えることになり、意見交換している場面である。「引きこもり」の対策として「出会い系で積極的に友達みつけたほうがマシ」というAの意見に対して、調査協力者が読むBは同意または不同意の「うん」を含む発話で自らの立場を表明する、というものである。同意の「うん」を含む発話は「うん、かなりマシかも」で、不同意の「うん」を含む発話は「うん、でもなんか出会い系ってさ、危なそうだし、もっといろんな方法あるんじゃないかなって思うんだけど」である。

2.5 分析の対象とした韻律的特徴

須藤(2007b)の分析から、「うん」の意味・機能の分類に、持続時間と F_0 (基本周波数)曲線の

表3 調査協力者の性別・年齢・出身地・職業

	性別	年齢	出身	職業
A	男性	20歳代前半	東京都足立区	学生
B	女性	30歳代前半	東京都杉並区	会社員
C	女性	20歳代後半	神奈川県横浜市	フリーター
D	女性	20歳代前半	東京都葛飾区	フリーター
E	女性	40歳代前半	東京都文京区	学生
F	男性	30歳代前半	神奈川県川崎市	学生
G	女性	20歳代後半	東京都八王子市	会社員
H	男性	40歳代前半	東京都北区	学生
I	男性	20歳代前半	東京都足立区	学生
J	男性	20歳代後半	東京都稲城市	研究者

形状が大きく関わっていることが判明した。そこで、今回の実験においては、持続時間と F_0 曲線の形状、そして、 F_0 変化幅を分析の対象とした。持続時間については音声波形とスペクトログラムを手がかりに、「うん」と後続発話の間の無音区間の開始部まで、無音区間がない場合は後続発話の「かなり」の[k]、「でも」の[d]の開始部までを「うん」区間として測定した。これ以外にも、「うん」の F_0 の高さや、分節的要素としての「うん」の音色、例えば鼻子音であるか、鼻母音であるか、といった要素も重要であり、今後分析に取り組まなければならない要素ではあるが、今回は分析の対象とはしていない。

3. 分析

3.1 持続時間

図1は、10名の調査協力者の3回の読み上げから得られた同意・不同意の「うん」の持続時間の平均をまとめたものである。同じ調査協力者で同意・不同意の持続時間を比べてみると、同意よりも不同意のほうが持続時間の長い傾向があることがわかる。同意・不同意を固定因子、調査協力者を変量因子として二元配置の分散分析を行ったところ、固定因子の水準間に有意な差があった ($F(1,9) = 16.862$ $p = .003$)。

このことから、まず、同意と不同意では「うん」の持続時間が異なり、不同意のほうが持続時間の長い「うん」が現れやすいということが言える。

3.2 F_0 曲線の形状・変動幅

次に、それぞれの「うん」の F_0 曲線の形状を観察した。同意の「うん」の場合は開始部から100ms辺りまで緩やかに上昇する場合もあったが、開始部が高く終了部が低い、下降傾向を示した⁷⁾。また下降 ほぼ平坦下降という曲線も見られた⁸⁾。

一方、不同意の「うん」は、おおむね同意の「うん」と同じように、開始部が高く終了部が低い下降傾向が見られたが、調査協力者によっては、1.5半音程度の F_0 変動幅で終了部まで緩やかに上昇し続け、終了部で下降する、「うん」全体として上昇部が長く、下降傾向が見られないものもあった。

その上で、同意・不同意の「うん」の開始部 F_0 最大値と終了部 F_0 最小値の差、および、その区間の持続時間より、1秒当たりの F_0 下降幅 (F_0 下降の傾き) を求めた⁹⁾。図2は10名の調査協力者の3

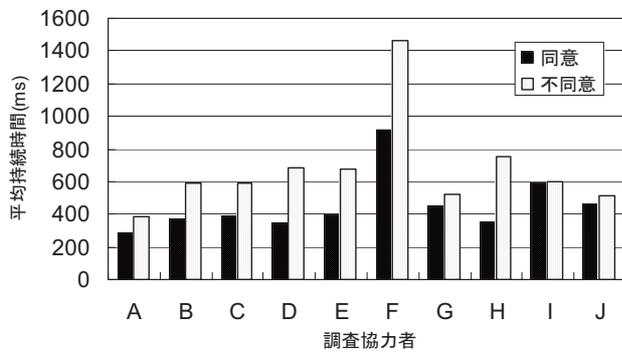


図1 10名の調査協力者から得られた同意・不同意の「うん」の持続時間の平均

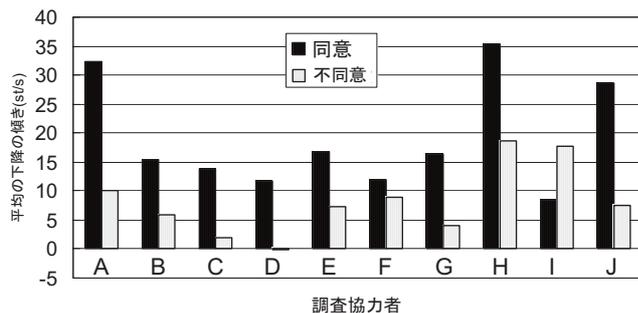


図2 10名の調査協力者から得られた同意・不同意の「うん」の F_0 下降の傾きの平均

「うん系」感動詞の韻律的特徴に関する一考察
「受け入れ」にかかわる意味・機能をめぐって

回の読み上げから得られた F_0 下降の傾きの平均を示したものである。これについても、同じ調査協力者で同意・不同意の F_0 下降の傾きを比べてみると、調査協力者Iを除いた、10名中9名について、同意の傾きのほうが大きいという傾向が見られた。 F_0 下降の傾きについても、同意・不同意を固定因子、調査協力者を変量因子として、二元配置の分散分析を行った結果、固定因子の水準間に有意な差が見られた ($F(1,9) = 14.649$ $p = .004$)。

3.3 分析のまとめ

「うん」の持続時間および F_0 曲線の形状・下降の傾きについて、前節までの分析から言える受け入れの「うん」の韻律的特徴は以下の3点にまとめられる。

1. 不同意の「うん」は同意の「うん」より持続時間が長い。
2. 同意・不同意とも F_0 曲線はおおむね下降の傾向が見られる。
3. 同意の「うん」は不同意の「うん」より F_0 下降の傾きが大きい。

では、これらの韻律的特徴は、受け入れの「うん」、同意・不同意の「うん」においてどのようなことを意味しているのだろうか。次節で詳しく考えることにする。

4. 結果と考察

4.1 受け入れの「うん」と F_0 の下降

同意・不同意とも F_0 曲線はおおむね下降傾向が見られた。 F_0 の下降は、受け入れの「うん」以外にも、応答要求発話に対する肯定的な応答の「うん」や、行為要求発話に対する承諾の「うん」にも見られる特徴であるため、表1の「情報の入力に対する肯定的な結果表示」(A-1)の共通の特徴であると言えよう。

4.2 同意・不同意の「うん」と持続時間 不同意の際の配慮と持続時間

「うん」の持続時間については同意・不同意の間で差があり、不同意の「うん」のほうが長いという結果となった。会話分析の観点から考えると、不同意の「うん」を含む発話は、先行する発話の期待に反する発話であり、Pomerantz (1984) では、相手の評価に対する自分の評価として同意が好ましい場合 (agreement preferred) における不同意 (disagreements) と述べられている。Pomerantz (1984) によると、不同意では、沈黙や確認要求や繰り返しといった、種々の遅れ (delay) が見られるという。また、このような「選好されない応答形式 (dispreferred responses)」について、橋内 (1999) では、相手の体面を傷つけないようにするために、応答までに時間を要し、言い遅れ (delay) や誤ったスタートや言い淀み (filler) があり、種々の和らげる表現 (mitigators) を用いるため、長めの応答になり、独特な韻律的特徴や外見的特徴が出現する、といった特徴を持っていると述べられている。

これを踏まえ、日本語の感動詞について具体的に考えてみよう。例えば、即興で行うスピーチで、次に話す内容や適切なことばを考えたりするときに現れる「ええと」や「あのう」などに見られるように、話し手の情報の処理に時間がかかると、一般的に、感動詞の持続時間も長くなる傾向がある¹⁰。それでは、持続時間が比較的長い不同意の「うん」の話し手が、情報の処理に時間をかけている場合、なぜ情報の処理に時間がかかるのであろうか。不同意の「うん」の話し手は、この場合、親しい友達である相手の意見と自分の意見が異なることを表明しながらも、互いの対人関係を維持しなければならないというジレンマに陥る。話し手はそのジレンマを克服すべく、持続時間の長い「うん」によって、考慮し苦しむことを相手に示すことで、自分の意見が相手と異なるものであっても、一定の配慮の上で発せられていると相手に解釈してもらえるよう意図しているのである。したがって、相手との対人関係の維持を前提に考えると、持続時間については、不同意の「うん」のほうが、特別な配慮の必要がない同意の「うん」に比べ長いということが言えるのではないだろうか。

このように、不同意の「うん」の持続時間が長くなることについては、異なる意見を表明しながらも、相手との関係を維持し、相手への配慮を示すためのストラテジーと説明でき、会話分析において観察される現象とも一致した。

4.3 同意・不同意の「うん」とF₀下降の傾き 肯定的な要素とF₀下降

今回の分析では同意の「うん」のF₀下降の傾きが、不同意に比べて大きいという結果が出た。上で触れた「情報の入力に対する肯定的な結果表示」のF₀の下降傾向という全体的な特徴を踏まえると、「うん」の持つ肯定的な要素はF₀の下降に関与すると仮定できる。受け入れの「うん」についても、話し手が相手の発話内容を聞いて理解するという側面から肯定的な要素が備わっていると言える。その上で、同意の「うん」は、発話内容を聞いて理解し、さらに、その発話内容に同意するため、受け入れの度合いが強い。つまり、肯定的な要素が強いと言え、F₀下降の傾きもより大きくなったと考えられる。一方、不同意の「うん」は、発話内容を聞いて理解する程度で、発話内容に対し同意はしないため、受け入れの度合いは弱い。つまり、肯定的な要素が弱いと言え、そのため、F₀下降の傾きもより小さく、また場合によっては下降が実現していなかったと考えられる。

5. おわりに

相手の発話を聞いて理解する際の受け入れの「うん」は、受け入れの度合いや形式の面から非常に多彩であるが、受け入れの度合いが「うん」の持続時間やF₀変動、特にF₀下降の傾きといった韻律的特徴にある程度反映されていることが、同意・不同意の「うん」に関する会話文読み上げ実験の分析によって明らかになった。そして、その要因と考えられる「不同意の際の相手への配慮」と「肯定的な要素の強さ」についても指摘できた。

しかしながら、特に持続時間については、調査協力者間の個人差が大きかった。今後は、聴取実験により、これらの音声のうちで最も「同意らしい」、「不同意らしい」ものを抽出し、その音声的特徴を検討していかなければならないであろう。

また、4節で触れた「考慮中」や「肯定的な要素」は、今後、全体的な「うん」の意味・機能を考える上でも重要な概念であり、他の意味・機能についての「うん」の分析を進める上でさらに検討していかなければならない。

さらに、今回の分析では扱わなかった「うん」の音色や、「うん」のF₀の高さについても今後検討する余地がある。

付記

本稿は日本音声学会第20回全国大会(2006年10月1日 於: 順天堂大学)で行った研究発表の内容に加筆および修正を加えたものである。また、本稿を含む研究は財団法人博報児童教育振興会の博報「ことばと文化・教育」研究助成(助成番号: 05-A-0022 研究タイトル: 「日本語感動詞の音声の意味するもの 談話上の機能を中心に」)を受けている。

注

1. ここでは、一般的に用いられている表記を採用しており、「うん」や後述の「うん」がウンという音素で構成される語であることを示すものではない。
2. 本稿では特に断りがなければ、「話し手」と書いた場合、便宜的に感動詞の発話者を指すものとし、この話し手に対する聞き手を「相手」または「聞き手」とする。なお、この用語の使い方は感動詞があいづちとして

「うん系」感動詞の韻律的特徴に関する一考察
「受け入れ」にかかわる意味・機能をめぐって

- 用いられる場合、感動詞を発する人が談話上の役割として聞き手となるということを否定するものではない。
3. 本稿における「(言語的な)意味・機能」とは、感動詞を文法論上の語として扱う場合の「意味」と、「あいづち」「フィラー」などといった談話上の現象として扱う場合の「機能」を指し、対人関係等にかかわる非言語的な機能とは区別する。
 4. 以下では、受け入れの「うん系」感動詞を、(受け入れの)「うん」とする。
 5. 会話例の文字化に用いられている記号は[資料1]を参照。また、【会話例1】のZ03の「うん」は鼻子音性が強く、持続時間は236ms、 F_0 曲線は5.23半音の下降であった。
 6. 【会話例2】のW05の「うん」は鼻子音性が強く、持続時間は301ms、 F_0 曲線は1.45半音の下降であった。
 7. 下降後終了部で F_0 の上昇も見られたが、これは後続発話の「かなり」のアクセントに影響を受けたものであると考えられる。
 8. 部分的に F_0 下降が見られない場合も、下降区間が最も長く、開始部が高く、終了部が低ければ下降傾向と判断した。
 9. ただし、上昇傾向が見られたものについては、開始部の F_0 最小値と終了部の F_0 最大値の差から求め、 F_0 下降の傾きを負の数とした。
 10. 山根(2002)の「話し手の情報処理能力を表出する機能」には、話し手が情報処理の時間を稼ぐために、フィラーを連続させる、5拍以上の長いフィラーを使うといった特徴が見られる。

引用談話資料

1. ドラマ『野ブタ。をプロデュース』日本テレビ(木皿泉脚本,白岩玄原作)2005年11月26日放送分(会話例1)
2. 『真剣10代しゃべり場』NHK 2005年11月25日放送分(会話例2)

参考文献

- 川上薫(1992)「うなづきと下降調」東京学芸大学国語国文学会(編)『学芸国語国文学』24, 23-26.
- 熊谷智子(2003)「シナリオのある会話 ドラマの日本語の特徴」『日本語学』22: 2, 6-14.
- 郡史郎(2006)「対人関係・対人態度を反映する韻律的特徴 特に目上に対する話し方について」土岐哲先生還暦記念論文集編集委員会(編)『日本語の教育から研究へ』167-176, くろしお出版.
- 定延利之(2002)「「うん」と「そう」に意味はあるか」定延利之(編)『「うん」と「そう」の言語学』75-112, ひつじ書房.
- 杉藤美代子(2003)「ドラマの音声」『日本語学』22: 2, 16-23.
- 鈴木一彦(1973)「感動詞とは何か」鈴木一彦・林巨樹(編)『接続詞・感動詞』(品詞別日本文法講座; 6) 137-175, 明治書院.
- 須藤潤(2005)「会話参加者間の社会的関係による感動詞の音声的特徴 応答における「あ」のバリエーション」『社会言語科学』8: 1, 181-193.
- 須藤潤(2007a)「否定の感動詞「うん」「いや」の音声的特徴に関する一考察」『社会言語科学会第19回大会発表論文集』14-17.
- 須藤潤(2007b)「日本語感動詞「うん」の意味・機能の分類から音声的特徴の分析へ」『音声研究』11: 3, 94-106.
- 須藤潤(2008予定)「日本語感動詞の音調記述の試み 1 音節感動詞を中心に」近畿音声言語研究会(編)『音声言語』6.
- 田窪行則・金水敏(1997)「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会(編)『文法と音声』257-279, くろしお出版.

- 富樫純一 (2002) 「はい」と「うん」の関係をめぐって」定延利之 (編) 『「うん」と「そう」の言語学』 127-157, ひつじ書房.
- 橋内武 (1999) 『ディスコース 談話の織りなす世界』 くろしお出版.
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』 くろしお出版.
- 山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』 くろしお出版.
- Pomerantz, A. (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/dispreferred turn shapes. In J. M. Atkinson and J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action*. (pp. 57-101). Cambridge: Cambridge University Press.

[資料1] 談話資料文字化の際に使われた記号

- [二人以上の発話や音声为重なり始めた時点。
] 発話や音声の重なりが終了した時点。
= 前後に感知可能な間隙がまったくない。
(数字) その数字の秒数だけの間隙がある。
(.) ごくわずかの感知可能な間隙 (0.2秒程度) がある。
: 直前の音が引き伸ばされている。コロンの数は引き伸ばしの相対的長さ。
- 直前の語や発話に声門閉鎖音が聞こえる。
. 直前部分が下降調の抑揚。
? 直前部分が上昇調の抑揚。
文字 下線部分が前後の発声に比べ音量が大きく強調されて発話されている。
°文字° この部分が前後の発声に比べ音量が小さく弱められて発話されている。
hh 呼気音 (笑いやため息) を示す。hの数は呼気音の相対的な長さ。
(h) 呼気音にことばが重ねられている場合に、発話の途中に挿入する。
.h 吸気音 (笑いや息継ぎ) を示す。hの数は吸気音の相対的な長さ。
(発話者名) 発話者が誰であるかに疑問がある場合。
((文字)) 転記者によるさまざまな種類の注釈・説明。

[資料2] 調査協力者に読んでもらう指示文と会話

- 1 . AとBは学校でよくおしゃべりする親しい友達です。AとBは学校の課題で「引きこもり」についての対策を考えることになっていて、そのことを話し合っています。BはAの意見を聞いて同意します。

A: なんか、だれとも付き合わないでひきこんでるよりは、
 出会い系で積極的に友達みつけたほうがマシかな、と思うよ。
B: ■■■、かなりマシかも。

- 2 . AとBは学校でよくおしゃべりする親しい友達です。AとBは学校の課題で「引きこもり」についての対策を考えることになっていて、そのことを話し合っています。BはAの意見を聞いていながらも、Aの意見には納得いかないところがあるという姿勢をとっています。

A: なんか、だれとも付き合わないでひきこんでるよりは、
 出会い系で積極的に友達みつけたほうがマシかな、と思うよ。
B: ■■■、でもなんか出会い系ってさ、危なそうだし、
 もっといろんな方法あるんじゃないかなって思うんだけど。